

大庭みな子

帽子の聴いた物語



帽子の聴いた物語

大庭みな子

講談社

ぼうし き ものがたり
帽子の聴いた物語

一九八三年八月二十日 第一刷発行

著者——大庭みな子

© Minako Oba 1983, Printed in Japan



発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—三—三 郵便番号二三 電話東京〇三—九四—二二（大代表）振替東京—五〇

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——藤沢製本株式会社

定価——一二〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

帽子の聴いた物語・目次

白頭鷺	帽子	鳩	虹の繭	紅茶	釣りともだち
99	75	47	25	13	7

初出一覧	佐渡	海	どんぐり	道	若草
226	213	201	169	137	125

装幀 辻村益朗

帽子の聴いた物語

釣りともだち

波がちぶちぶと舟底を舐めている。しなやかに吸いつき、くすぐり、もてあそび、まどろみ、いたぶり、果しのない夢を絹糸のようにたぐり出すやわらかな舌である。

めくれあがつてひらめき、もの憂くうずくまり、ゆるやかにくねりながら執拗にからみつき、ときにほんのわずかなとげとげしさをずる賢こく媚びに変えてうそぶく、ひややかで無心の遊びをくり返す。

ときおり思い出したようにばらついたり、また、おだやかな日ざしが気紛れに漂ったり、絶好の釣り日和だった。こういう日には、魚が、ゆらめく波間の餌を追って吸い寄せられるように集まってくる。

二人はときどき、波の音に耳をかたむけるために、リールを巻く手を休めた。それからまた、思い出したように、リールを巻いた。

思っているうちに相手のリールがギリギリと鳴り、魚が疾走した。

「そうら、かなり大きいぞ」顔を紅潮させてリールを巻いている男の唇が、もてあましているものを耐えるようにゆがんでいる。

彼らはもう二十年來の釣り友だちだった。釣り友だちというのは不思議なもので、ほとんど口も利かず、一日黙って釣り糸を垂れていても退屈しない相手でなければならぬ。それでいて、そこに相手がいるということで、妙な安らぎを感じ、お互いに、つきたいと思う河岸や、ボートの向きが、奇しくも一致するといった間柄なのだ。そして、釣り上げたときは、第三者にみまもられている愉しみがある。

相手の竿に魚がかかって、リールを巻いているときは、片方は同じように昂奮して、それを眺めている。「逃すなよ、最後のところで、糸をゆるめるな。ほうら、よし、その調子、へさきをこっちに向けるかな。スクリューに糸がからまないように」といった具合なのだ。

やがて鱒は虹色の腹をひらめかせて、たぐり寄せられた。涙でうるんだ眼で宙を見上げ、びくりと慄えて、やがてぐったりとする。

白い腹の脂肪が虹色に輝くのだった。

彼は鱒の唇から針をはずすために、赤い口の中に指を突っこんだ。鰓の鮮やかな赤さに、傾きかけた太陽が微笑んだ。涙でうるんだ眼の真中で瞳が凝固している。虹色の腹の、小さなひれの附け根。

二人の男はものを言わず、波が舟底を舐める音を聞いていた。ちぶ、ちぶ、と絶え間ない囁き

だった。

彼らは、夜、湖にでるときは、女を連れて行き、舟底に横たえる。腹を天にして、和毛を月の光に輝かせながら、猫がじゃれつくように四肢を宙にからませるところへ、かわるがわる餌を投げてやるのだった。猫は首をふり立てて唇の両脇から銀色のしたたりを光らせる。

女は宿で待っている筈だった。シートにくるまって、怠惰な猫のように寝ているだろう。ときどき薄眼をあけて、反った瞼で光を押し出す。

夜の舟の中で横たわると、彼女はそういうふうに月の光も押し出す。一人の男は舟の真中に坐り、漕ぎ出す。急がずに、ゆっくりと、波に逆らわずに、白い腹が蒼い月の波の中でゆらめき、尾がしない、背筋を慄わせて、弓なりに緊張するのを、もう一人の男はへさきに坐ってじっと眺める。

ほんのわずかに弧を描かせるように舟の舵をとる。唇のすぐ間際で、流した餌をちくちくと思わせぶりにちらつかせながら、魚が、女が、跳躍してそれを呑みこもうとすると、ひょいと糸を引く。細い糸が銀色に光り、蒼い波の中で再び緩慢に月色の腹がうねり始める。

じっとみつめていると、からだがいんとしびれてきて、唇が慄えてくる。

「そう、そういうふうに――。さあ、今、ほら、――。そうだよ。うまくやった。――そして、竿を立てて、しなわせて、糸をゆるめちゃいけない。あとは、きり、きり、と巻く」逆もどりする相手のリールの音の快さに、男はうっとりとする。

一方が愉しんでいるときは、自分は竿をあげて、糸をたぐり、次の餌を入念に針に仕掛け、タバコに火をつけて、ふなばたにひき寄せられてくる魚を、暗い波をすかしてみまもるのだ。

「そうだよ、きみの釣りはまさに名人芸だ。そういうふうには仕とめられれば、魚も天国行きた」彼はほっと息を吸いこみながら、がっくりと顔を伏せて、針を抜く。深く、赤い、のどに、静止した血脈がふくれあがっている。

「さあ、今度は、きみがうまくやれよ。おれは、一服つけて、白い灰から、薄い煙が立ちのぼるのを、眺めているさ」

「まあ、そう言わずに、一緒に餌を流せよ。いつだったか、背と腹に両方の針をひっかけて、尾からあげたことがあったじゃないか」

紅 茶

